

使徒の働き27章 「遭難の中での証し」

1A 向かう風を受ける船 1-8

1B アジア沿岸の航行 1-5

2B イタリア行きの船 6-8

2A パウロの警告 9-20

1B 船体と命までの危険 9-12

2B 暴風 13-20

1C 一時的な好機 13

2C 船体の補強 14-17

3C 積荷の遺棄 18-20

3A パウロの励まし 21-44

1B 預言 21-26

2B 指示 27-38

1C 水夫の確保 27-32

2C 最後の食事 33-38

3B 船の座礁 39-44

本文

使徒の働き 27 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、先週で 26 章に来ました。パウロは、カエサルに上訴して、ついにローマに連れて行かれることとなります。その船の旅において、ほとんど遭難しそうになります。しかし、その遭難の中で大きなことが起こります。船の実質的な舵取りを、船長に代わってパウロが行っていくのです。自分自身も遭難の苦難を受けながら、なおのこと神の証しを立てていきます。

私たちはこれまで、口によるパウロの証しを見てきました。ユダヤ人に対して、ローマ総督に対して、それからアグリッパ王に対して弁明する時に、パウロは口で語りました。しかし、ここで彼は言葉は少ないけれども、実質的に同船している者たちを救う働きをすることによって、神がおかれることを証するのです。今回は、日々の生活を歩んでいる中で、自分は本望ではないと思われる状況に置かれていると思います。例えば、職場。けれども、どうでしょうか？同じ職場にいて、そこは一種の運命共同体です。同じ仕事のチームは、同じ試練、同じ課題を通ることもあります。そこで、自分が信仰にしたがって動いていく時、人々に良い指針を与える機会となるかもしれません。それで、「俺は、神とかキリストは信じないが、こいつの信じているのは信頼できる。」と見直すかもしれません。行いによる証しです。しかも、全く不本意に思われる状況に置かれている中での証しです。

1A 向かう風を受ける船 1-8

1B アジア沿岸の航行 1-5

¹ さて、私たちが船でイタリアへ行くことが決まったとき、パウロとほかの数人の囚人は、親衛隊のユリウスという百人隊長に引き渡された。

パウロが監禁されていたカイサリアは、大きな港でもありました。船が出港する埠頭の遺跡もまだ残っています。そこから他にも監禁されていた囚人の何人かが、「親衛隊のユリウスという百人隊長」に引き渡されました。親衛隊は、近衛兵のこと、カエサル直属の部隊です。ここから、神のすばらしいご計画の始まりです。パウロは、最終的にローマにて、自分が幽閉されている間、親衛隊に証しし続けます。そして、ピリピ人への手紙 1 章 13 節には、こう書いてあるのです。「私がキリストのゆえに投獄されていることが、親衛隊の全員と、ほかのすべての人たちに明らかになり」その、その証しの第一歩がここで踏み出されたのです。

そして、ユリウスは「百人隊長」とありますね。新約聖書は、非常に興味深いことに百人隊長が出て来ると、そこには信仰深い姿が出てきます。イエス様がガリラヤにおられた時に、しもべの一人が死にかけていた百人隊長が、「ルカ 7:7b ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。」と言いました。百人隊長は、千人隊長から言葉で命令を受け、また部下に命令を下す立場にいるからです。ですから、その権威系統を知っているから、イエス様の権威に対しても信仰を持つことができました。そして、イエス様が十字架に付けられた時、その上で死なれた直後に、その現場をずっと見ていた百人隊長が、「23:47 神をほめたたえ、「本当のこの方は正しい人であった。」とあります。そして使徒の働きでは、カイサリアに駐屯していたイタリア隊のkolnereiusという百人隊長がいました。彼とその家族の回心によって、異邦人への宣教の鍵が解かれました。

² 私たちは、アジアの沿岸の各地に寄港して行く、アドラミティオの船に乗り込んで出発した。テサロニケのマケドニア人アリストアルコも同行した。

これは、云わば各駅に停まる電車みたいなものです。アジア、つまりトルコの南側の沿岸地域の各地に立ち寄りながら、最終的に、トロアスの近くにあるアドラミティオのところまで行く小型船です。

そして、「テサロニケのマケドニア人アリストアルコも同行した」とありますね。大事なのは、「私たちは」とありますから、ルカも同行しているということです。アリストアルコもルカも、パウロと共にカイサリアにいたということになります。彼が苦しみの中にいる時も共にいた同労者です。エペソの野外劇場の騒動になった時に、アリストアルコが捕らえられてしまっています(19:29)。また、パウロがローマにおいて監禁されている時に、コロサイ人への手紙を書いています、「4:10 私とともに囚人となっているアリストアルコ」と書いています。ルカもそのような人ですね、テモテへの手紙第二で、パウロが二回目にローマに投獄されているとき、つまり死刑判決を受ける直前に、「4:11 ルカだけ

が私とともにいます。」と書いています。福音の働きは、このように、見た目が良い時だけでなく、目立たない時も、苦しい時も、それでも共にいるということで、結束が生まれてきます。

³ 翌日、私たちはシドンに入港した。ユリウスはパウロを親切に扱い、友人たちのところへ行って、もてなしを受けることを許した。

カイサリアから、海岸沿いの北にあるシドンに着きました。ユリウスが、パウロを親切に扱ったのは、彼がローマ市民であったということもそうでしょうが、神ご自身がパウロに対する好意を与えられたからでしょう。バビロンに捕らえられていったダニエルに対して、彼とその友人を管理していた宦官の長について、「ダニ 1:9 神は、ダニエルが宦官の長の前に恵みとあわれみを受けるようにされた。」とあります。牢獄にいたヨセフもそうでしたね、「創世 39:21 主がヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。」とあり、監獄にいる囚人をヨセフの手に委ねています。つまり、ヨセフは監獄の鍵も渡されているのです。それほど信頼を受け、自由にされていましたが、それは神が恵みを施していたからです。みなさんのそばで、未信者の方なのに、なぜか自分に良くしてくれる人が職場に、身近にいるかもしれません。神がその人に好意と恵みを与えているかもしれません。

⁴ 私たちはそこから船出し、向かい風だったので、キプロスの島陰を航行した。⁵ そしてキリキアとパンフィリアの沖を航行して、リキアのミラに入港した。

これまでのパウロの宣教旅行の船旅もそうでしたが、風向きや天候によって、その進み具合や通る路が大きく変わります。パウロたちのローマへの船旅は、「向かい風」から始まります。地中海の風は、春と秋は主に西から東に吹きます。北西から吹く時も多いです。この時は秋です。ですから、逆風の中を進む航路です。それで、キプロスの島陰を航行するなどして、その向かい風を避け、そして、さらに北にいて、初めはキリキアの沖合、もっと西に行き、パンフィリアの沖合を航行しました。そして、その西にあるリキア地方にミラに入港できました。みなさんも、自分が職場や、その他の日常の生活で、なかなか前に進まないことってないでしょうか？ここは、そのような、遅々と進まない状況の中に、皆が置かれている状態です。

2B イタリア行きの船 6-8

⁶ ここで、百人隊長はイタリアへ行くアレクサンドリアの船を見つけて、それに私たちを乗り込ませた。

このミラにおいて、ようやく、長距離列車を見つけることができた！という感じです。アレクサンドリアは、エジプトにある地中海に面したローマにおいても有数の大都市です。エジプトからローマへの穀物の輸出は当時、最大のものでした。当時、客船というものはありませんでした。これは、

穀物を運搬する大型船であり、そこに旅人も乗船します。後で出てきますが、276 人が乗りこみました。この中に百人隊長は、パウロと同行者たち、また他の囚人たちお乗り込ませます。

⁷ 何日もの間、船の進みは遅く、やっとのことでクニドの沖まで来たが、風のせいでそれ以上は進めず、サルモネ沖のクレタの島陰を航行した。⁸ そしてその岸に沿って進みながら、やっとのことで、ラサヤの町に近い「良い港」と呼ばれる場所に着いた。

クニドは、ミラから西にある小さな島ですが、西からの風でもうそれ以上は進めませんでした。それで航路を南へと変えます。クレテ島が南にあります。テトスへの手紙にクレテのことが書かれています。エーゲ海の南に浮かぶ主な島です。クレタ島の東がサルモネで、その沖合を航行して、南側に回り、やっとのことで「良い港」と呼ばれる場所に着きました。

2A パウロの警告 9-20

1B 船体と命までの危険 9-12

⁹ かなりの時が経過し、断食の日もすでに過ぎていたため、もはや航海は危険であった。そこでパウロは人々に警告して、¹⁰「皆さん。私の見るところでは、この航海は積荷や船体だけでなく、私たちのいのちにも危害と大きな損失をもたらすでしょう」と言った。

9 月半ばから 11 月半ばまで、地中海の航行は危険でした。それ以降、5 か月間は冬の時期で、航海は完全にストップされます。「断食の日」とは、宥めの日、贖罪日とも呼ばれる、ユダヤ人の祭りで、ヘブル語ではヨム・キプールです。それが 9 月終わりから 10 月初めに行われます。つまり、もはや航海は危険だったのです。それでパウロが、この言葉を言いました。この後で、彼の言葉が、ことごとくその通りになります。著者ルカが詳細に、人々が積荷を降ろしていく様、船体が壊れそうになっていく姿、そしていのちにも危害が及びそうになる姿を描いていきます。

パウロは、宣教旅行において数多く、船に乗っていました。その中で難船にも何度となくあっています。「Ⅱコリ 11:25b 難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。」それらの経験から、これからの航海は危険であると言うことができたし、神は、この言葉を預言的に与えられました。なぜなら、この後でことごとくその通りになっていくからです。

けれども、この言葉は聞かれないままになります。多数の意見はそうではありません。多数が右に行こうと言っている時に、それでも、左に行かないといけないということは勇気の要ることですね。けれども、船の中にいる人々にとって益になると分かるなら、真っ直ぐに話す必要があったように、自分の置かれているところで、多数がそうでないと思っていることでも、そうだと言う勇気が必要です。

¹¹しかし百人隊長は、パウロの言うことよりも、船長や船主のほうを信用した。

これは、大きな言葉です。百人隊長は囚人パウロに好意を寄せていましたが、所詮、囚人です。プロである船長や船主のほうを信用するのが当然でしょう。しかし、これからこの船旅が、パウロがローマに行ってそこで証しをするという使命を神が与えられているゆえに、神が人間の能力や知識よりも、神がご自身の証しを立てるために、船長や船主以上のことを行われます。彼らの判断を超えることを行われるのです。

¹² また、この港は冬を過ごすのに適していなかったので、多数の者たちの意見により、ここから船出し、できれば、南西と北西に面しているクレタの港フェニクスに行き、そこで冬を過ごそうということになった。

これから 5 か月は過ぎなければいけなくなるので、多数の者たちがこの港で過ごしたくないと思ったのは当然です。そしてフェニクスという港は、良い港から 80 ㎞西にあります。一日で到達できる距離です。焦る気持ちが大半にあったのではないかと考えられます。

2B 暴風 13-20

1C 一時的な好機 13

¹³ さて、穏やかな南風が吹いて来たので、人々は思いどおりになったと考え、錨を上げて、クレタの海岸に沿って航行した。

この季節には珍しい南風が吹いています。けれども、ここにヤバイ言葉があります、「人々は思いどおりになった考え」であります。「箴 16:25 人の目にはまっすぐに見えるが、その終わりが死となる道がある。」自分には良かれと思っていることが、とんでもない火傷を負うようなことがあるのです。蛇がエバに見せた、「目に慕わしく」見せていた木は、何と呼ばれていましたか？「善悪の知識の木」です。悪いものだけでなく、善いことの知識も誘惑になります。

2C 船体の補強 14-17

¹⁴ ところが、間もなくユーラクロンという暴風が陸から吹き降ろして来た。¹⁵ 船はそれに巻き込まれて、風に逆らって進むことができず、私たちは流されるままとなった。

いわゆる台風級の暴風です。欧州大陸から、北東から吹いてくる風です。これでクレタ沿岸から地中海の大会に放り出されて、船は制御不能となりました。

¹⁶ しかし、カウダと呼ばれる小島の陰に入ったので、どうにかしっかりと小舟を引き寄せることができた。¹⁷ そして小舟を船に引き上げ、船を補強するために綱で船体を巻いた。また、シルティスの

浅瀬に乗り上げるのを恐れて、船具を降ろし、流されるに任せた。

カウダは、クレタの南にある孤島です。小舟は救命ボートの役割を果たすので、それを引き上げて、また船の本体が破壊されないように、綱で船体を撒きます。そして、スルティスという浅瀬が、北アフリカのリビアから広がっている浅瀬です。そちらに乗り上げると座礁しますから、船具を降ろしたとあります。これが帆のことを指しているのか、錨のことを指しているのかわかりません。帆であれば、船がさらに流されるままにしていた、ということになります。

3C 積荷の遺棄 18-20

¹⁸ 私たちは暴風に激しく翻弄されていたので、翌日、人々は積荷を捨て始め、¹⁹ 三日目には、自分たちの手で船具を投げ捨てた。²⁰ 太陽も星も見えない日が何日も続き、暴風が激しく吹き荒れたので、私たちが助かる望みも今や完全に絶たれようとしていた。

積荷や船具までも捨て始めました。船体を軽くして、転覆しないようにするためです。それでも、暴風は吹き止みません。三日目には助かる望みも完全に絶たれようとしていました。パウロが警告していたとおりのことが、ことごとく起こっています。

3A パウロの励まし 21-44

1B 預言 21-26

²¹ 長い間、だれも食べていなかったが、そのときパウロは彼らの中に立って言った。「皆さん。あなたがたが私の言うことを聞き入れて、クレタから船出しないでいたら、こんな危害や損失を被らなくてすんだのです。²² しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う人は一人もありません。失われるのは船だけです。

ここから、パウロの励ましの言葉が始まります。長い間、人々が誰も食べていなかったと言っていますが、船酔いから、また希望を失ったことから来る食欲減退でしょう。彼はこれから励ましの言葉を言って、後に、食べなさいと指示を与えます。その他にもいろいろな指示を与えます。けれども、前回のように誰にも聞いてもらえなければ、せっかくの希望も台無しになります。それで、「あなたがたが私の言うことを聞き入れて、クレタから船出しないでいたら、こんな危害や損失を被らなくてすんだのです。」と言ったのです。「ほれ見ろ！言わんこっちゃない！」という事ではなく、パウロは、これからは、言うことを聞いてもらうために敢えて言いました。そして、「元気を出しなさい。」と言っています。苦しみの中で生きる希望さえ失いかけていた人々に、生きる勇気を与える言葉をかけたのです。そして明確にこれから、起こることを語ります。一つは、船は失われることです。けれどももう一つは、命だけは助かることです。しかも、一人も失われる命はありません。

²³ 昨夜、私の主で、私が仕えている神の御使いが私のそばに立って、²⁴ こう言ったのです。『恐れ

ることはありません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。』

ここでパウロが言っている「神の御使い」ですが、私はなんとなく、イエス様ご自身のことではないのか？と思っています。ここに乗船している人々は、キリスト教とは全く関係のない人々ばかりです。けれども、彼らはローマやギリシアの神々は信じている人々です。ですから、自分の仕えている神について、その神に遣わされた方について語りますが、彼らに合わせて、「私の主で、私が仕えている、神から遣わされた方」というような言い方をしたのではないか？と思います。

これで何度目でしょうか、四度目です。夜に、パウロに神が語られたのは四度目です。一度目は、トロアスで、マケドニア人が夢の中で助けに来てくれと言いました。次にコリントです。ユダヤ人から口汚く罵られて、その後で、主が幻の中で、「18:9 恐れなくて、語り続けなさい。」と言われました。そして、エルサレムでパウロが、ユダヤ人に証しするも、殺されかけて、サンヘドリンの中でも体が二つに引き裂かれそうになって、その夜に主イエスご自身がそばに立たれました。そして言われました。「23:11 勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでもわたしのことを証したように、ローマでも証ししなければならない。」

主は、船の中で、エルサレムにパウロがいた時に語られていたことを、さらにはっきりと約束してくださいました。「あなたは必ずカエサルの前に立ちます。」カイサルの前に立って、そこで主を証しすることになるということです。そして、パウロがローマで証しするがゆえに、同船している人たちの命も助ける、と言われているのです。神は、このような形で運命共同体にいる人々を助けてくれることがあります。主がそこで選ばれている者がいるために、その中にいる人々すべても救うということがあります。そうすることによって、神がおられるということ、まだ神を知らない人々に証しされることのあるのです。しかも、難船のような危機の時に、神は信仰者を用いるようされます。なぜなら、危機の時は皆が平等になるからです。百人隊長であっても、船長であっても、囚人であっても、貿易商人であっても、船にいる限り、平等です。皆が命が救われるのかどうか、ということで目的が一致しているからです。

²⁵ ですから、皆さん、元気を出しなさい。私は神を信じています。私に語られたことは、そのとおりになるのです。²⁶ 私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」

再び、「元気を出しなさい。」と励まし、自分は神を信じていることを明言します。だから、これは自分の言葉ではなく、神からの言葉でその通りになる。そして、どこかの島か分からないけれども、どこかに打ち上げられると明言しました。

皆さんが、ここの船のように、否応なしに置かれている状況があるかもしれません。それは不快

かもしれません。けれども、そういった危機こそが、実は神を証しする好機なのです。自分が神に信頼することによって、その困難を仲間と共に乗り切るため全力を尽くすことによって、立派な証しを立てることができるのです。

皆さんにお勧めする映画があり、「ハクソーリッジ」と言います。沖縄戦の中でも激戦であったことを描いています¹が、米軍の中で、何と武器を持たずに戦った衛生兵がいたのです。デズモンド・ドスという人ですが、彼は、セブンスデー・アドベンチストという教会の信徒でした。彼には、人を殺してはいけないという良心がありました。けれども、お国のために戦いたい。彼の所属の部隊では、上官を始め、仲間からも徹底的にいじめました。武器を持ってない兵士など、恥でしかなかったからです。けれども、この戦いにおいて、たった一人で、まだ敵兵がたくさんいるところで、怪我をした仲間を次々と助けていくのです。さらには、負傷した敵兵までも救助したりします。上司は、深く反省します。デズモンドに対して、「お前は私が会った中で、最も勇敢な男だ。私は神を信じないが、お前が本当に神を信じているということを、心から信じている。明日も戦いだ、どうか一緒に行ってくれ。どうか、戦う前に祈ってくれ。」と頼みます。部隊は、デズモンド・ドスの勇敢な救護活動に励まされて勇気を出し、また戦うのです。彼は後に政府から名誉勲章を受けます。

もちろん戦争ですから、その場所は生き地獄です。凄惨です。けれども、主人公はその凄惨な場所に自らを置き、なおのこと、神に対する信仰と祈りを貫いていました。すると、運命共同体である仲間にも、彼には神がおられる、そして自分たちもその恩恵を受けるのです。自分の置かれている状況がたとえ不本意であっても、しかし神がそこに置いておられるのだ、証しのために立てておられるのだということを知ってください。

2B 指示 27-38

1C 水夫の確保 27-32

²⁷ 十四日目の夜になり、私たちはアドリア海を漂っていた。真夜中ごろ、水夫たちはどこかの陸地に近づいているのではないかと思った。

トルコとギリシアの挟まれたところがエーゲ海ですが、ギリシアとイタリアに挟まれた海を、アドリア海と呼びます。十四日目には、アドリア海を漂っていました。水夫たちは、その熟練によって陸地に近づいているかどうか、感覚で分かりました。

²⁸ 彼らが水の深さを測ってみると、二十オルギヤであることが分かった。少し進んでもう一度測ると、十五オルギヤであった。²⁹ どこかで暗礁に乗り上げるのではないかと恐れて、人々は船尾から錨を四つ投げ降ろし、夜が明けるのを待ちわびた。

¹ <https://www.city.urasoe.lg.jp/docs/2017052900033/>

初めは 36 ㍊、次に測ると 27 ㍊でした。だんだん陸地に近づいています。そして夜に座礁してしまつたは、元も子もありません。錨を投げおろし、そこで停泊するようにしました。

³⁰ところが、水夫たちが船から逃げ出そうとして、船首から錨を降ろすように見せかけ、小舟を海に降ろしていたので、³¹パウロは百人隊長や兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたは助かりません」と言った。³²そこで兵士たちは小舟の綱を切って、それが流れるままにした。

水夫は、自分たちだけ助かろうとしました。プロの水夫たちがいなければ、助かろうにも助かりません。再び、人々が焦るという事が起こっています。ここでパウロが百人隊長や兵士たちに指示します。立場が逆転していますね。つまり、神から与えられた証しに、彼らも動いているのです。

2C 最後の食事 33-38

³³夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めて、こう言った。「今日で十四日、あなたがたはひたすら待ち続け、何も口に入れず、食べることなく過ごしてきました。³⁴ですから、食事をするよう勧めます。これで、あなたがたは助かります。頭から髪の毛一本失われることはありません。」

パウロは最後の励ましをします。今度は、具体的に食べ物を食べてほしいと言います。これから自分たちで岸辺まで泳ぐか、何かにつかまって陸地まで動かないといけないからです。

³⁵こう言って、彼はパンを取り、一同の前で神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。³⁶それで皆も元気づけられ、食事をした。³⁷船にいた私たちは、合わせて二百七十六人であった。

すばらしいですね、まるで教会の人々と共にいるような状況になっています。そこが礼拝の場のようになっています。一同の前で感謝の祈りをささげて、それを裂いて食べ始めて、それでみなが元気づきました。イエス様の四千人、五千人への給食にさえ似ています。

³⁸十分に食べた後、人々は麦を海に投げ捨てて、船を軽くした。

先に、この船が穀物船であることを話しましたが、ここが理由です。麦がたくさん積まれていたが、もう船から降りることができるので、船が沈む深さを浅くすることを優先しました。

3B 船の座礁 39-44

³⁹夜が明けたとき、どこの陸地がよく分からなかったが、砂浜のある入江が目にとまったので、で

できればそこに船を乗り入れようということになった。

これはマルタ島というところであることが、28 章に書いてあります。マルタ島には、砂浜の入り江があって、「聖パウロ湾」と呼ばれるところがあり、そこはマルタの最大の町になっています。

⁴⁰ 錨を切って海に捨て、同時に舵の綱を解き、吹く風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んで行った。⁴¹ ところが、二つの潮流に挟まれた浅瀬に乗り上げて、船を座礁させてしまった。船首はめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波によって壊れ始めた。

慎重に入り江に向かっていましたが、浅瀬に乗り上げて座礁させてしまいました。そして、最後の危機が来ます。

⁴² 兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと図った。⁴³ しかし、百人隊長はパウロを助けたいと思い、彼らの計画を制止して、泳げる者たちがまず海に飛び込んで陸に上がり、⁴⁴ 残りの者たちは、板切れや、船にある何かにつかまって行くように命じた。こうして、全員が無事に陸に上がった。

先ほどは水夫たちが焦っていましたが、今度、ここではローマ兵たちが焦っています。囚人たちを逃がしたら、自分たちが罰せられて、殺されるかもしれません。けれども、百人隊長がパウロを助けるためにその計画を制止しました。その代わりに、泳げる者は泳ぎ、板切れや他の何かに乗っていきように命じます。

そして素晴らしいのが、「こうして、全員が無事に陸に上がった。」であります。パウロが励ました通り、だれひとり命が失われませんでした！

そしてマルタ島を地図で見ると、クレタ島からずっと西にある、イタリア半島の南、シチリア島の南にあります。冬は西から東に吹く風が主ですが、ユーラクロンは北東からの暴風です。それで、彼らは航行の始め、西に向かうことが困難でしたが、この暴風によって逆に東から西に押し流されて、一気にイタリアに近づいたのです。ここに神の御手を感じざるを得ません。自分の目に真っ直ぐに見えることを行うなら、焦り、平安がなく、死へと向かいますが、主に拠り頼むところには、道は真っ直ぐにされるのです。「箴 3:5-6 心を尽くして【主】に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。6 あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。」どうか、その主に拠り頼んでいる姿を、自分の置かれている場所で、人々に見せていくことができますように。